

「X橋 紹介文」

岡和田晃

平田真夫さんの「都市伝説X」は、山野浩一さんの「四百字のX」のなかでも、「箱の中のX」を下敷きにしているのではないかと、先だって私は書きました。

これを読んで刺激を受け、「X塔」や「同窓会X」の構造も創作的批評という形で応答できれば、面白いのではないかと思いました。そこで書いてみたのが、「X橋」です。

先回りして解説しますと……「SF Prologue Wave」の編集長・片理誠さんの指摘によれば、「同窓会X」は、シリーズで唯一、本文に「X」が出てきません。

「X」が私という存在の空虚さを象徴する記号だとすれば、それが無限に増殖していき、あたかも怪物がごとく国家を困らせるのが「X塔」でありました。

そこで、「同窓会X」に倣って本文に「X」を登場させず、「X塔」とは異なる方向性にできないかということ、で、「X橋」を考えてみました。保田與重郎やゲオルク・ジンメルを引くまでもなく、橋は社会と個人とをつなぐものですから。なお、「同窓会X」で「S」が出てくるのは、フロイトの「Es=Es」を含蓄しているのかもしれない。

2 存在の不安。というわけですね。

オマージュとしての出来は、平田さんの「都市伝説X」の方がはるかに上かと思いますが、さすが、「X橋」をお読みいただければ、「四百字のX」がやろうとしていたことが、よりはつきりと見えてくるのではないか。そう愚考する次第です。